第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年9月1日

剣道修錬における幾つかの道標について(上)

全剣連審議員
中村　龍夫

一　変化の潮流の中に求められる人間形成

◇変化の潮流には瞬時の休みもない。

日本経済は、終戦による廃墟からの立直り、世界第二の経済大国への発展、所謂バブルによる崩壊等々、激しい変化にさらされた。今日なお景気は上昇に至らず、本格的なグローバル化の中に経済競争力は弱体化し、各般にわたる抜本的な構造改革を喫緊事としている。

◇しかも、問題は、経済力の衰退に止まらず、もっと奥深いところにある。独立自尊の精神を失った他人依存の考え方は各層に及び、常識を超える各組織のモラルの低下、規律の弛緩、家庭の崩壊と青少年犯罪の増加等があり、教育改革が叫ばれてもその核心に据える精神的な支柱が欠けている。

歴史は「一国の盛衰はその国民の精神世界のヴァイタリティにある」と教える。精神的世界の荒廃こそ最も深刻な問題であり、活力醸成のためには様々な観点からの人間形成が強く求められている。

二　山岡鉄舟の再評価とその行動に学ぶもの

「日本という経済大国は、二十一世紀を目前にしてほころび、あまつさえ欲望の果てに公的精神を見失い、腐蝕の構造をあちこちで露呈し始めたではないか。しかも冷厳な国際社会のルールは非武装中立という美しい物語を紡いだ戦後体制を否定している。第二の開国、維新という声が澎湃として起こってくる内憂外患ともいうべき時代状況と、山岡鉄舟の再評価という作業は、当然、深くかかわってくるのである。」

これは、日本経済新聞の小島英熙氏が、同紙の「詩歌・歴史・文芸」の日曜版に連載された「鉄舟―春風を斬る」の一節である。

剣道人としての山岡鉄舟は、無刀流の元祖として著名である。だが、明治維新に際して、江戸城無血開城の実質的役割を「西郷隆盛と勝海舟の会談」に先立ってやってのけ、西郷をして、「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。ただこの始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。」という有名な遺訓を残させたのは外ならぬ鉄舟であったことは一般には余り知られていない。

◇鉄舟は次のように語っている。

「戊辰の年、官軍がわたしの主家である徳川慶喜を征伐しようとしたときのことである。

官軍と徳川方の交渉は絶たれ、上層部はただ日夜、気は焦り苦心するばかりであった。わたしは、慶喜の真情を聴き、その謹慎の誠意を朝廷に伝えることを慶喜に断言し、天地に誓って死を覚悟し、自分一人で官軍の陣営に行って、大総督宮へ慶喜の衷情を上申することで国家の無事を保とうと考えた。

勝の書状をもち、薩摩藩士益満休之助を伴い、第一関門の六郷河の官軍の先鋒隊の銃隊の中を〝朝敵徳川慶喜の家来山岡鉄太郎だ、大総督にいくぞ！〟と断って突破し、以後の長州の隊中は益満を先に立て昼夜兼行で駿府に到着し、官軍の参謀西郷吉之助に直接面会を求めた。西郷との直接談判に当たっては、慶喜が恭順謹慎し、生死のことは朝廷の決定に従おうとしている赤心を語り、それに向かってあえて大軍を向ける非を訴え、天下大乱を防ぐためにも、徳川に寛大な処置あって然るべき旨を説いた。西郷もついにはこれを認め、両者の会談により、実質的な江戸城無血開城と、慶喜の名誉を配慮した処置が決定した。」と。

この歴史的な事実は、不世出の達人鉄舟にして初めて達成し得た救国の功績として評価されるべきものであって、「武士道の権化」の人であり、剣禅一如、悟道体得の域は凡俗の到底近づき得ぬ世界である。

◇しかしながら、角度を変えてみると、この中には、私共が心構えとして、また努力の方向として学び、我々なりに歩み、敢えて進むべき道が示されている。

その第一は、鉄舟の行動は単なる決死行ではなかった。死は覚悟していたが、その達成の可能性を見透した理にかなう智恵があったことである。

「官軍の陣に行けば、かれらは必ずわたしを斬るか捕縛する。だがいくら敵であるからといっても、是非を調べもせずにいきなり人を

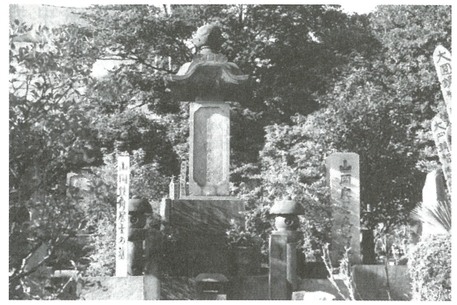
第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年9月1日

斬る法はない。だからこれは不可能な計画ではない。」との判断が先ずあった。

そして勝海舟をして「山岡は明鏡の如く一点の私をもたなかった。だから物事に当たり、即決して毫も誤らない」と言わしめた「無私」の精神が智恵の源泉であったのである。

我々は、個人としても組織人としても種々窮地にたち、対応に苦しむことがある。しかし乍らそれへの対応に当たり正しい解答を得る道は、不思議にもこの「私をもたぬ」、ことばを変えれば、「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」の角度からの心構えと思考の展開にある。「明鏡に至り得ぬもの」にもそれなりの新しい智恵が湧く。私の実務体験もある。

私がかつて日本鉱業㈱の企画担当役員時代、会長の庭野正之助氏（剣道の大先輩でもある）は常に「私達のこと―会長や社長のこと―は考えなくていいのだよ！」と言われた。重大事項の取扱いに当たっての一言が、天啓の如く関係者の全身をかけめぐり、短期間で成案を得た記憶がある。また、ここ数年来の企業盛衰の中で、「身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」の思いがその経営TOPの胸を早くよぎっていたら別の展開があったのではないかと思う例が少なくない。


東京・谷中全生庵にある山岡鉄舟の墓

◇その第二は、勝負既に決し、敗軍の将の部下である鉄舟が些かも悪びれず筋を通し、西郷と堂々と対等の立場で交渉討論した姿勢である。

そこには、西郷のいう「ただ恐懼狼狽するばかりで、いうことに筋が通って何にもならぬ使者」と異なり、「山岡には一徳川の事情をこえた日本国の将来への忠誠という高い観点からの熱意と誠意あふれる構図があった」のである。

それは、沢庵和尚が、不動智神妙録にいう、とらわれざる心を鉄舟が己がものとしていたことから来る発想であった。

我々は、苦境に立ち、ピンチに遭遇した時、ともすれば、その部分にこだわり、全体像を見失う。弥縫策をもって止むを得ぬものとし、結果において損害を大きくしたり、新しい難問題をすら併発する。しかし、鉄舟が到達した悟道であり沢庵和尚のいう「葉一つに心をとられ候わば、残りの葉は見えず。一つ心に止めねば、百千の葉は見え申し候」の心は、全体構図の正しい成案をつくりあげる。

◇かつて、日本鉱業が、アフリカザイール国で周辺諸国の政治情勢の乱れから銅鉱山の存続の可否を検討した時、少なからぬ損害もさること乍ら、数十人の日本人社員の安全確保が相当危惧される中で、社長の佐々木陽信氏（元全日本実業団剣道連盟副会長）が「一兵も損じてはならぬ。しかしそれをおそれては、本隊が危い」として断固下した撤退命令。そして、その対策樹立に苦悩するスタッフに対し、「六方を踏んで帰れ！」と指示した会長の庭野氏の言葉は、千金の重みで関係者一同に勇気と行動の智恵を与えた。一企業の問題であるが、組織活動のきびしさとその実践に当たっての忘れられない「サムライ」の言であり、姿勢である。

三　胴田貫の如き人物像こそ道標

◇剣道の修錬に当たり、私達は自らの力の限界への挑戦とその克服と究極の剣道人の映像を求める。そのような意味から、直心影流第十四代榊原鍵吉先生の「兜割」の記を紹介する。（剣聖山田次朗吉先生の生涯・大西英隆氏著による。）

「明治二十年、伏見宮殿下の御邸に、明治天皇の行幸を仰ぎ、一流の剣士を集めて兜割の天覧が行われる事になった。兜は名工明珍鍛えの南蛮鉄桃形の有名な兜であった。榊原先生にも当然出場の依頼があった。兜は刀で切れない様に作られており、同先生として、若し失敗したならば直心影流の名誉を傷つけることになるので、再三お断りしたが聴き入れられなかった。

止むなく、斎戒沐浴して兜切りを試みられた。種々の太刀を振りかざして日夜専心に兜を打ち切ろうとされたが、刀の刃がこぼれたり刀が折れまがったりして少しも切れない。よってその旨を正直に申し上げ御辞退方を願い出た。ところが、駄目でよいからともかくやってみよと云う陛下のお言葉が伝えられた。止むなく悲壮な覚悟を決めた先生は、所持する日本刀、刀屋から購入の日本刀を何十本となく兜割の稽古に用いたが、兜には一寸も切り込まなかった。

『思へども人の力に限りあり力を添へよ武甕槌神』と

日夜斎戒沐浴して鹿島大明神に祈念を籠められる有様は、荘厳襟を正さしめるものがあった。斯くするうち当日となった。未暁に起床し出発時刻を待っているところへ出入の刀剣商がかけつけ『先生どうか今日は此の太刀を御使用願いたい。これは有名な胴田貫という刀です。』と申し込んできた。先生は神の力添えと感謝しこれを携えて現場に到着し静かに順番を待った。一流剣客が次々と進み出て打ちかかったが、兜にかすり傷すら負わし得なかった。

先生は、静々と出場し、胴田貫の一刀を振りかざし、至誠一枚になりきって、斬らうとも思はず、ただハッシと計り満身の気合と共に打ち込んだ。すると不思議や、稽古ではいくらやっても斬れなかった明珍の兜の八幡座を美事サックリと三寸五分切り下げていた。」

第38回東日本中堅剣士講習会の中村講師

◇この胴田貫による兜割について、直心影流第十五代を嗣がれた山田次朗吉先生は、「剣道の真髄はこれである。剣道が人間の小さな才覚の外にあること斯くの如くである。」と語られた。更に付言して「榊原先生が正宗等の名刀を用ひず胴田貫を選ばれたのは流石である。人間も胴田貫のやうでなくては大事業は出来ない。見た所は左程立派でもなく、鈍重な不細工な感じであるが、どんな堅い物に遭っても、決して折れず曲らず、常に綽々たる余裕を示している。胴田貫になることを忘れてはならぬ。」と戒められたという。

◇去年「剣道功労賞」を受けられた星野一雄先生は、ニューギニア戦線の御体験を「剣道時代誌」に次のように記されている。

「手りゅう弾で左肩左足を負傷し、しばらく歩けなかったが戦況の悪化に伴い移動することになった。松葉杖をつき乍ら〝なにくそ〟という気持ちで行軍していたら、膿がいやというほど大量に出た。そうしたら何かおもしがとれたように快復していった。吉川英治著〝宮本武蔵〟の中で、武蔵は足が化膿して耐えられなくなった時、山に登って膿を何升か出したら治った、というくだりがあったことを思い出した。」と。

先生は、所属していた師団二万人のうち生還者六百名たらずの中の一人であるが、「あとで考えると窮地に立たされても不思議と一歩前へ、という気持ちで事に当たっていた。その教えはまさしく剣道から得たものであり、それが平常心となり、的確な判断へ導かれた。」とも語って居られる。剣道修錬と人格形成の成果であり、なぜか「剣道が人間の小さな才覚の外にあること斯くの如くである」という前述の山田先生の言が頭に浮かぶ。

◇思うに、「兜割を通じてかかげられた胴田貫の如き人物像」は二十一世紀において我国が必要とする人間像の一つであり、私達にとっての道標である。

仕事が、順調に進み、時の流れに従って、業績が向上している時、往々にして小才が効き、巧言者が表面に立つ。しかし、難問に逢着し四面楚歌の様相を呈し始めた時、必要な人材は「胴田貫」の如き人物である。多くが右顧左眄し動揺する時、冷静に問題の本質をとらえ、いかなる困難にあっても、折れず曲がらず、正攻法をもって事に臨む為には、平生からの修錬に当たり、この人間像が描かれているのが望まれる。それには、また、人材を発掘し、評価する側の人間観も重要であろう。　（つづく）

（これは6月15日の第38回東日本中堅剣士講習会における講話を書き改められたものです）

■ 講演・講話 ■

第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年9月1日

第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年10月1日

剣道修錬における幾つかの道標について(下)

全剣連審議員
中村　龍夫

四　剣の達人「柳生宗矩」に送った親友「沢庵和尚」の忠言

◇諸兄は「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とする」きびしさを実践されておられる。と同時に、それぞれの仕事を通じ社会人としての活動をされている。私は、さきほどの二つの具体例を申し上げたが、一つは剣道人として、今一つは社会人としての観点の道標として取り上げてみた。これは、剣道の精神が社会生活に活き、また真摯な社会生活は、その徹するところ、剣道にはねかえると考えているからである。

◇このように考える時、どうしても欠くことができない人間形成の倫理道標があると思う。それは、「不動智神妙録」において沢庵和尚が柳生宗矩に書き送った友情の忠言に端的に表われている。以下松原泰道師が著書「沢庵」で述べている要点を紹介しつつ所感を述べる。

沢庵は、無二の親友であり、剣における無双の達人の「宗矩」に対し将軍家光の高官としても人間的完成の強い念願をこめて、忠告の言を送った。

沢庵は、ずばり人倫の基本から説き始める。「先ず我心を正しくし、身を修めて、少しも君（将軍）を裏切る心なく、人を恨んだり、咎めることなく、毎日のつとめをおこたらず、家にあっては父母によく孝をつくし、礼儀を正しく、妾婦を置かず色欲の道にも走らず、親として厳かに道に従うことです。」そして部下の使い方は、「分け距てなく公平に用を弁じさせ、善人を重く用いて、自身の徳の足りない点を反省し政治をする。心の善くないものを遠ざけることが肝要である。」「小人を遠ざけ、賢人を好むことを急ぎ実行せよ。」

「色を好むか、奢り（思いあがり）気隋（わがまま）からか、僅かでもそのような一念が生じると、善人を用いず無智な（人間な）れど登用する。」そして「貴殿(宗矩)の弟子を取りたてるにこのようなことを聞き、苦々しく（きわめて不愉快）存じ候」と直言する。

更に「諸大名からの賄（わいろ）による欲をいましめ、自分の趣味（能舞）の諸大名への押しつけを指摘し、挨拶（お世辞の巧みな）のよき大名の将軍へのひきたての反省を求めている。

沢庵の墓は東京・品川の東海寺墓地にある

そして長男十兵衛三厳（みつよし）の行蹟（身持）に対しては、先ず「宗矩自身の身を正しく成されその上にて意見すべし」と強く迫っている。

沢庵は、宗矩の不正の事実を指摘し、彼の反省を求め、結びに次の和歌を記し人間的精進の要請をしめくくっている。

「心こそ　心迷はす　心なれ
心に心　こころゆるすな」

松原泰道師は、沢庵が「迷のもとは心にある。心を一ヶ所に止めてはならぬ。心を何かに執られてはならぬ」との持論をこの歌に托したと述べている。

◇個人としてまた組織人として、「身を持すること厳であるべきこと」は古来より膾炙している言葉である。しかし乍ら、人様々であり、好悪の情はつきものである。類型的把え方はできても個性は区々である。そして「諫言は苦く、巧言は甘い。善言あっても用いざれば無きが如し」余程注意していても、時に「情に流される」可能性は常に存在する。「他に寛容であれ！」も人生訓の一つとして慣用句でもある。だが、それは時として、「自己と他を弁解し庇護すること」と分別し難い。

沢庵のいう「善人の理論」は構成する人々の納得と組織発展の基礎である。しかしてその運営は苦楽を共にする上司、同僚、部下の中にあっても正邪の区分は厳正公平でなければならない。名将「諸葛孔明」が可愛がっていた部将馬謖（しょく）の命令違反をとがめ「涙をふるって馬謖を斬った」規律の厳しさの要請も古今の哲理である。

◇一度、人間形成と言う時、容易に悟道に達し得ぬ我々としては、「この道の初心者」として沢庵の

第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年10月1日

「宗矩に対する忠言と持論」を心にとめる道標として受け入れ、心の修錬を行う段階があるべきだろう。

また、組織体の長は、時に「組織体」の維持発展を期するためには諫言を聴くとともに、たとえ部下から「冷徹」と言われても、あえて厳しく「ものを言い」仕事を貫徹せねばならぬ時もあるだろう。

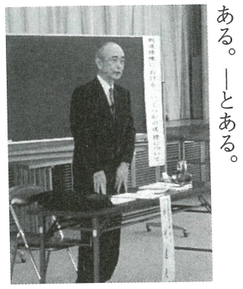
五　未熟者や不器用者に差し延べられる数々の救いの手

◇これまで山岡鉄舟をはじめ二、三の足跡をたずね、併せて人間形成に当たっての忠言を列記した。これに向かって一途に尽瘁（じんすい）し得るならば、まさに孫子のいう「百戦常に危うからず」である。

しかし、直面する現実の道程は旦々ではなく、難問難題の登場はつきものである。凡俗は時に挫折感を味わい、不遇を託（かこ）ち、自己の菲才（ひさい）を歎いて道に踏み迷う。これに対し、先人は「よくよく吟味あるべし」「よくよく鍛錬あるべし」更には「命の限りの勤めなりけり」等と叱咤（しった）激励するばかりでなく事理を極めた「救いの手」も差し延べている。

◇先ずは直心影流の理歌に「不器用も稽古を常に嗜（たしな）めば、器用の人を押して行くべし」とある。また、「一句三百遍という時は、ただ愚かにかへるべし」という。

修業中は一句をば三百遍ずつもというように心を長く愚になって一つ事に数を重ねて、骨を折るべきである。長い内には色々にかわって時にかえって業がおちる様な気になることもあり、いやになることが幾度もあるものである。これは業のその度に上る処であるから、其所を辛抱することが肝要である。―とある。



中堅剣士講習会における中村講師

人それぞれに得手、不得手がある。しかし、一番情なく思うのは、「才がない」と他より指摘され自らもそれを自覚することである。その時の不器用者に対する力強くやさしい支援の言葉である。

剣道にしろ、仕事にしろ、凡俗にとってはいかに好きな道であっても、順調ばかりでなく中途にして、必ず停滞の踊り場があり、技術実力の低下すら感じ、「報われざる努力を思い、いやになる」ことがある。

個人然り、組織体の活動も同じである。その時にこの句の深い励ましの意味を想起し得れば、継続の勇気と力が湧き、難問に正面からぶつかり得る。仕事において特に然りである。問題の基本をとらえて工夫をねり、正攻法をもって一切の力を結集して迅速果敢に当たる時、克服できぬ問題はない筈である。

◇宮本武蔵の独行道に「われ事において後悔せず」とある。

これは厳しい修錬の覚悟を語ったものであるが、失敗した時の対応について、西郷南洲（隆盛）がその遺訓で別の角度から実践的な話をしている。

「過ちを改るに、自ら過ったとさへ思い付かば、夫にて善し。其の事を捨てて顧みず。直に一歩踏み出す可し。過ちを悔しく思い、取り繕はんと心配するは、たとえば茶碗を割り、その欠片を集め合せるにも同じにて、詮もなきこと也。」と。「過ぎたるものは、過ぎたるものをして葬らしめよ、今日のことは今日にて足れり」であり、この思想は非生産的思考に煩わされず、明日へ向かっての一歩を踏み出し易い「救いの論理」でもある。

◇また、大先輩、小川忠太郎先生の「大八車」の話（剣道講話・剣と道より）は戦後の経験として身近に感じる。

戦後剣道が禁止になり先生が教員と百姓をやっておられた頃のことである。

「家が駒沢まで一里（四キロ）ある。その間を乞食のような姿で大八車を引いて行く。そんなある日、俄雨に逢う。あまり車が重かったためか、かつて考えたこともない人間並みの考えがひょいと頭に浮かんだ。風雨の中をこんなに働いて一日いくら位の金になるだろう。こう考えると、重い車がさらに重くなり車を引くのが嫌になった。そこでまた考えてみた。」

「坐禅は何のためにやるか。坐禅は只座るのである。何の結果も求めない。坐禅がそうなら人間の仕事もそうである。結果を求めず、ただ現在の仕事になりきればよいのだ。雨の中でこう思い返すと心が軽くなり意気揚々、衝天の気で家に帰った。」まさに考え方・発想

第三種郵便物認可　　月刊 剣 窓　平成12年10月1日

の転換である。

◇松原泰道師は言う。

「私たちの人生にも血の涙を流し、心も凍る厳冬があります。人生の楽天地は、逃げ出して得られるのでなくその境地に徹することにより初めて得られる。」と。

禅の悟道の境地からの語りかけは、私達未熟者に対しても救いの道を指示している。それは、凡俗の表現をもってすれば「ものは考えよう」である。西郷南洲のように「予壮年より艱難と云う艱難に罹りしゆえ、今はどんな事に出会うとも、動揺は致すまじ、夫れだけは仕合せなり。」との考え方をすれば、大概の問題は、それぞれの人の器量なりに対処できる道がひらけてくるに違いない。

修錬の道、人間形成の道の道標は豊かである。

六　第二の維新への対応

◇はじめに問題提起したように、現状、日本の精神世界の荒廃には目を覆うものがある。また、国際競争力の弱体化は、各業界の再編を余儀なくし、IT革命に対する立ち遅れは目立ち、将来の発展分野である生化学分野も後塵を拝している。加えて国内諸体制の未整備は、まさに日経の小島氏のいう「内憂外患交々来る」である。

戦後の諸体制は、グローバル化の観点からすれば、批判の対象にとどまらずむしろ積極的な再整備を要請されている。その原理は、国も企業も個人も「適者生存」の厳しい競争下に立つことであり、思い切った表現をすれば「力あるものが生き残り天下を制する」産業戦国時代の到来である。然りとするならば、現在直面している「第二の維新」への対応には何としても新たな「エネルギー」を、生み出さねばならない。

◇思うに、「明治維新の興国」と「戦後荒廃からの繁栄」の二つは、他の国、他の民族に類をみない、まさしく快挙であったに違いない。しからば、この日本民族固有の活力の源泉はどこにあったのであろうか。それは、明治興国の底流に「和魂―武士道」の精神があった。また、戦後の高成長を達成しえたエネルギーは、関係者の若い頃から鍛えられた潜在的な「さむらい魂」によるところ極めて大であったと信じている。

元通産審議官坂本吉弘氏は、戦時中満州の撫順炭坑で働いた一鉱山労働者の口ずさんだといわれる「身をいずこに置くとも、目を世界に、心を祖国に」のことばを常に心のよりどころとされた。また、新渡戸稲造博士の説く「富貴を求めず、名誉を最高の善とした武士の高い倫理観」の「武士道」の精神が公務員の姿勢に通じると力強く後輩に語りかけている。

国際化といい、グローバル化という。しかし世界の何処にも「国際人」なるものは存在しない。あるのは国であり民族である。そして民族のエネルギーは窮極のところその民族固有の文化の中に潜んでいる。大競争時代への対処に当たって、今までの経験的事実に徴し、日本の場合はその「根底」に「武士道」の潮流が流れ、ここに活力の再生が成ると思う。そのような意味で、我々が掲げる剣道の修錬と人間形成の道標に向かっての個々の地道な努力の積み重ね、それは一見迂遠のようであるが、二十一世紀におけるわが国の一つの精神的支柱ともなる可能性をもつと確信する。

（終り）

（これは6月15日の第38回東日本中堅剣士講習会における講話を書き改められたものです）